

No. 270

拳法圖解完

久富鐵太良先生著

明治二十一年一月出版



剛柔
能為

明治廿年八月

安立利經

拳法圖解序



余嘗聞之。射飛鳥之術。以矢穿其羽翼。而獲之者。為巧手。中傷體軀者。次之。夫區々禽鳥。猶且獵獲之有法。若斯矣。而況於緝捕人乎。今視此書。就十有六家之拳法。精撰審

揀。舍華虛取實要。修正補足。
以新定樣式。凡二十條。加之
以捕繩及活法二項。且一一
附圖畫施訓解。丁寧指示。於
緝捕之術。蓋亦盡矣。抑不暴
殄天物。仁愛之公道也。惡其
罪而不惡其人。立法之本旨

也。自今之後。為警官者。豫據
此書。講習練熟其技。則率然
臨緝捕。不致傷其肢體髮膚。
而兇徒斯獲焉。暴行斯止焉。
可以全仁道矣。可以合法旨
矣。豈啻盡其職務而已。然則
此書之關係。亦不鮮少也。及

其乞序不辭而書之

明治二十年三月

米華小原重哉撰



其類散史書

拳法圖解

緒言

西人言ヘルコアリ強壯ナル身體ニ活潑ナル精神アリト身體強壯精神活潑
 ナラザレバ事業ハ得テ爲スベカラザルナリ國家ノ興廢モ亦大ニ各人ノ強
 壯ニ關スル所アリ蓋シ身體ヲ強壯ナラシムルノ法ハ種々アリト雖モ未ダ
 柔術ノ利アルニ勝ルモノナシ夫レ柔術ハ我國武技ノ元質ニシテ之ヲ講ス
 ルルハ體格強健身心安穩ナルヲ得ルガタメ事變ニ處シ不慮ヲ制スルニ靈
 敏快活ナラザルハナシ其法ニアリ一ハ則チ人性ノ體質ヲ矯正シテ柔順圓
 滑ナラシメ以テ能ク他ノ剛強者ヲ制伏スル是ナリ一ハ則チ八個ノ劍體ヲ
 六個ノ虛處ニ當テ以テ能ク他ノ剛強者ヲ捕縛スル等はナリ故ニ身體ヲ強
 壯ナラシムベキハ言フモ更ナリ或ハ兇漢不逞ノ徒ヲ制シ及ビ之ヲ縛スル
 等ニ從事スル警察官吏ノ如キハ平素ヨリ此術ヲ講修スルヲ以テ最モ必要
 ナリトス余輩曾テ斯術ヲ講修スルノ必要タルニ感シ之ヲ警部室田景辰氏

ニ謀ル氏モ亦同感アリ大ニ之ヲ賛成シ別ニ計畫スル所アリテ之ヲ安立警
 察本署長ニ上陳ス署長大ニ之ヲ然リトシ且ツ諭スニ諸流ノ所長ヲ採擇シ
 在來ノ法制ヲ改良シ以テ實際適用ノ形手ヲ編成セシム因テ素志ヲ達スル
 期ノ近キニ在ラントスルヲ喜ビ奮然トシテ此ニ從事セリ實ニ明治十八年
 ナリ同年十月ニ至リ各署ニ在リテ此術ニ長ゼル士二十有六名ヲ集會シ各
 其技術ヲ演スルニ總テ十六流アリ各流互ニ繼奧ヲ叩キ秘旨ヲ發シ萃ヲ採
 リ要ヲ擇ビ間ニ修正ヲ加ヘテ實際ニ適用ナラシメ以テ此書ヲ編成シ名ケ
 テ拳法ト曰フ然リト雖モ余輩素ヨリ拙劣ナレバ未タ此ヲ以テ術ノ完全ヲ
 得タルモノトナスコト能ハス尙ホ實際ニ徴シ且ツ世上高士ノ贊助ヲ得テ他
 日ニ大成ヲ期セントス今ヤ圖解成ル謄寫ノ勞ニ代ヘ印刷ニ付シ以テ同志
 ノ士ニ頒ツトイフ

明治十九年十二月

編者識

拳法圖解 目錄

第一	體勢
第二	距離
第三	對當位置
第四	柄取
第五	柄止
第六	柄擲
第七	見合取
第八	片手脚取
第九	腕止
第十	襟投
第十一	摺込

第十二	敵ノ先
第十三	帶引
第十四	行進左上頭
第十五	同 右突込
第十六	同 左右腰投
第十七	同 右壁副
第十八	同 後口取
第十九	陽ノ離レ
第二十	變化亂取
第二十一	捕繩
第二十二	活法

附 緣起並各流派概畧

目錄 畢

拳法圖解

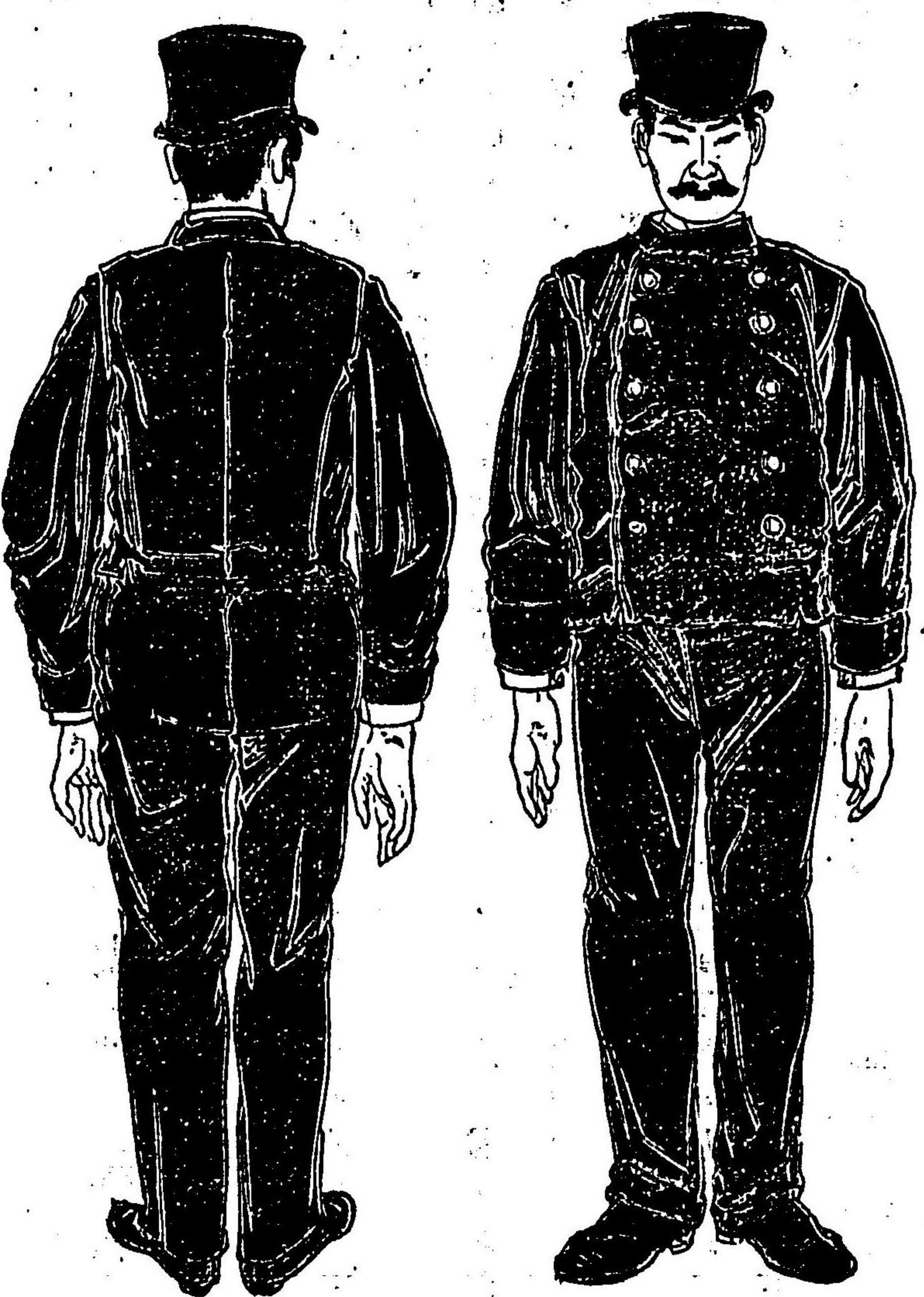
久富鐵太郎 編輯

第一 體勢



毎日ツ體勢トハ頭ヲ正面ニシテ兩手ヲ垂下シ胸廓ヲ開キ腹部ヲ突出シ臍下ニ力ヲ入レ且ツ腹ヲ充實シ脊骨腰骨ヲ突キ居エ腰ヲ整フルヲ云フ途中行歩ノ際ハ勿論片時モ此姿勢ヲ亂スベカラズ

又帶劔スル時ハ左手ニテ劔ノ柄ヲ握リ右手ヲ垂下スベシ凡ソ體ノ前面ハ陽ニシテ後背ハ陰ナリ前ハ直伸シ後ハ屈曲ス是レ一己ノ節制ヲ整フル第一ノ手段ニシテ姿勢ノ本體ナリ近來世人漸ク情弱ノ風ニ流レ胸廓屈ミ腹部脱シ本體ノ姿勢ヲ失スルモノ比々トシテ皆然リ之ヲ柔術ニ於テ反ノ體トイフ大ニ嫌フ所ナリ此ノ反體ヲ矯正セザレハ節制ヲ整フルヲ能ハズ勢法ヲ講ズルモノ須ク注意スベシ即チ左ノ圖ノ如シ



第二 距離

距離トハ其場ノ廣狹ヲ計リ敵手仕手ノ間合貳間或ハ三間ニシテ互ニ禮式ヲ爲シ後ニ左足ヨリ踏出ヌヲ法トス而シテ一段ノ勢法ヲ講シ終リタル後ニ漸ク次ノ勢法ニ移ルキ相互ニ後背ヲ見スベカラズ凡ソ勢法ヲ講習スルハ真正ノ實事ニ非ザルヲ以テ自然形容ニ流レ易ク既ニ從來ノ流派ニテモ往々異様ノ姿勢ヲ爲シ恰モ俳優ノ所作ヲ爲スガ如ク容止華法ヲ事トスルモノアリ最モ戒ムベキナリ假令ヒ講修ノ際ト雖モ真正ノ實義ヲ失ハザルヤウニ注意スベシ又流派ニヨリテ始終懸ケ聲ヲ用ユルモノアリ抑モ懸ケ聲ハ需メテ發スルモノニ非ズ又余ク發セザルモノニ非ズ畢竟初心ノ者ヲ教ユルニ形手ノ間合ニヨリ今踏出セ或ハ打懸レト合圖ヲ爲スノ言葉ナルヲ後修者ニ於テ必ズ用ユベキモノト信ズルハ誤リナリ講修ノ際ニ其勢氣充溢シ知ラズ識ラズ發聲スルハ可ナリト雖モ需メテ發聲スルハ腹力脱ケテ浮足トナルモノナリ宜シク注意スベキ事ナリ



四

月ノ新子

第三 對當位置

敵手仕手ノ間合一歩ノ地ニ至リタルキ仕手ハ必ス左足一步ヲ左リ斜ニ踏
 出シ即チ敵ノ右側ニ斜ニ位シ以テ敵ノ舉動ニ注意スルヲ行進ノ法トス蓋
 シ人ハ十中ノ九ハ右腕ノ利クモノナレバナリ故ニ十六段ノ内エリナケ及
 ビ左右行進レ後口取り陽ノ離レヲ除キ其他ハ總テ之ニ倣フ

五

第四圖解
 柄取其一
 元天神真揚流形手ノ内
 修正敵両手ヲ以テ仕手ノ
 帯ニクル劔ノ柄ヲ取ルナリ



月新



六

其二
 敵柄ヲ引カント
 ス仕手ハ左手ヲ其
 儘ニシ敵ノ引ニ俟
 右足ヲ踏出シ爾時
 ニ右手ノ小指ノ方ニテ
 敵ノ雙眼中央ニ當ルナリ
 (呼吸)



其三
 雙眼中央ニ當
 テタル手ヲ以テ
 直ニ腕ノ下ヨリ
 柄頭ヲ取り右
 足ト共ニ体
 ヲ右後ニ大キ
 ク倒ラセリ



其四

右ニ開キタル体ヲ変ジテ又
右足ヲ敵ノ左リ股ニ大キク
踏ミ込ミ其時柄ノ手ヲ
其儘上ヨリ左ニ廻シ
解キ放スナリ



第五圖解 柄止ノ

其一

洪川流手續勢車取
ノ内立合ニ改
メ敵左右ノ
手ニ仕手
ノ銀ノ柄ト右ノ
手首ヲ取り押シ
来ルナリ



刀利

其二
 其時仕手ハ右足ヲ引キ
 敵ノ右手ニテ下ヲ握ル
 内ヨリ上ニ左ニ廻シ同
 時ニ次ノ圍ノ如クスルナリ



其三
 敵ノ押來ル左リ手ノ
 カ尽クシヨリ我手ヲ
 開キ上揚シ下ヲ敵
 ノ手首ヲ取リ同時ニ
 敵ヨリ取リタル柄手
 ハ左リニ掃クナリ



其二

其時仕手ハ右足ヲ引キ
敵ノ右手ヲテ下ニ引ク
ヲ内ヨリ上ニ廻シ同
時ニ次ノ圖ノ如クスルナリ



其三

敵ノ押來レ左リ手ノ
カ尽クルヨリ我手ヲ
閉キ上ニ揚ケ下ヨリ敵
ノ手首ヲ取リ同時ニ
敵ヨリ取リタル柄手
ハ左リニ振ルナリ



其四

前ニ引タル右足ヲ直ニ
敵ノ右方ニ踏出シ体ヲ
左ニ閉キ握リタル敵ノ
手ヲ我方右股ニ
抱キ込ニ腰ヲ張
リ体ト腕トニテ固
ノ如ク之ヲ挟ム
ナリ



十四

其五

固面ノ如ク直ニ右膝ヲ
ツキ固ム



十五

其五

第六 圖解 柄搦

其一

立身流形手ノ内敵左右ノ
手ニテ仕手ノ帯ビタル劔ノ柄ヲ
握リ上ニ抜キ取ラントスル状ナリ



其二

敵ノ取リタル柄
ノ手ヲ両手ニテ
劔ノ柄諸共ニ
之ヲ握リ固ク
如ク右方(即チ
敵ノ左ノ上ニ突
キ揚ゲ右足ヲ
前ニ少シ踏出ス
ナリ



其三

突上タル手ヲ其終
ニ下ヨリ右ニ廻シ
敵ノ左手ヲ放シ其
手ハ直ニ敵ノ取タル
右手ヲ柄ト共ニ
握シ親指ヲ柄ニ
掛クナリ



其四

前圖ノ上ニ揚グタル手ヲ尚
右ニ廻シ右足ヲ引キ休ヲ右
ニ開キ左ノ膝ヲ敵ノ右
腕ヲ押甘ケ固ムルナリ



第七圖解

見合取

其一

戸田流喜
燕流形手
内敵手右
内三手隨持
凶器ヲ敵カ
ニ下ル西ナリ



其二

敵手已ニ凶器
ヲ抜キカケル
ニヨリ仕手ハ
右足ヲ踏出シ
右手ニテ敵ノ
右手首ヲ握
ルナリ



其二

其三

其特住手ハ迅速ニ
左足ヲ敵ノ右後
ニ踏出シ同
手ヲ敵ノ
ヨリ前ニ廻ワシ
右襟ヲ取其腕ヲ
伸シ一度ニ之ヲ締
メルナリ



其
一

其四

住手ハ又左足ヲ引キ膝ヲ付ケ
右足ヲ立テ右ニ廻

其
一



ハ
新

第八 圖解 片手胸取

其一

荒木新流形手ノ内敵手
左手ニテ仕手ノ襟ヲ取り
押掛ル片仕手右足ヲ引
左手ニテ敵ノ左リ手首
ヲ取ルナリ



其四
五十八ノ...

其二

仕手尚右手ニテ敵
手首ヲ取り右足ヲ前
ニ踏出スナリ



其三

仕手又右足ヲ引
膝ヲ固クシテ



二十五

第九 圖解

腕止メ

其一

起倒流形手内敵
右手ヲ以テ打カ
ラントスル圖



其二

二十六

其二

敵手既ニ打掛リタル片仕手
ハ右足ヲ引キ左足ニ
タル四



其三

仕手ハ受ケタル手
ニテ直ニ敵手ノ
打込ミタル右
手首ヲ取リ
右手ヲ敵手ノ
右肩ニ当テ又右足
ヲ踏込ミ敵ノ右足
ヲ拂フナリ



其四

前圖ノ如クニシテ仕手右手ヲ押シ
左手ヲ引キ前ニ投ケタルナリ



其三

第十 圖解襟投ケ

其一

関口流勢法内仕手
ヨリ仕掛ケ右
手ヲ以テ敵
手ノ前襟ヲ
取り右足ヲ踏
出シ押掛ル圖



其二

前圖ノ如ク押掛
ル敵手ハ仕手ノ右
ニノ腕ヲ押ヘ右ニ
開キ仕手ハ押掛
リタルマ、右膝ヲツキ
敵又右拳ヲ以テ打掛
ニトスル因



其三

敵手已ニ打掛ルニヨリ仕
手ハ其儘右腕ヲクマリ
右膝ヲ直ニシテ右ニ廻リ
左膝ヲ立テ敵手ヲ負
ヒタル因



其
因

其四

前國ノ如ク負タル
敵ヲ前ニ接シタル
因



三十四

其二

第十一圖解 スリ込 其一

無形手ノ内
相對シタル因



日新

三十三

其二
 敵手右足ヲ
 引キ右ニ開
 キ右拳ヲ以
 テ打掛ント
 スル圖

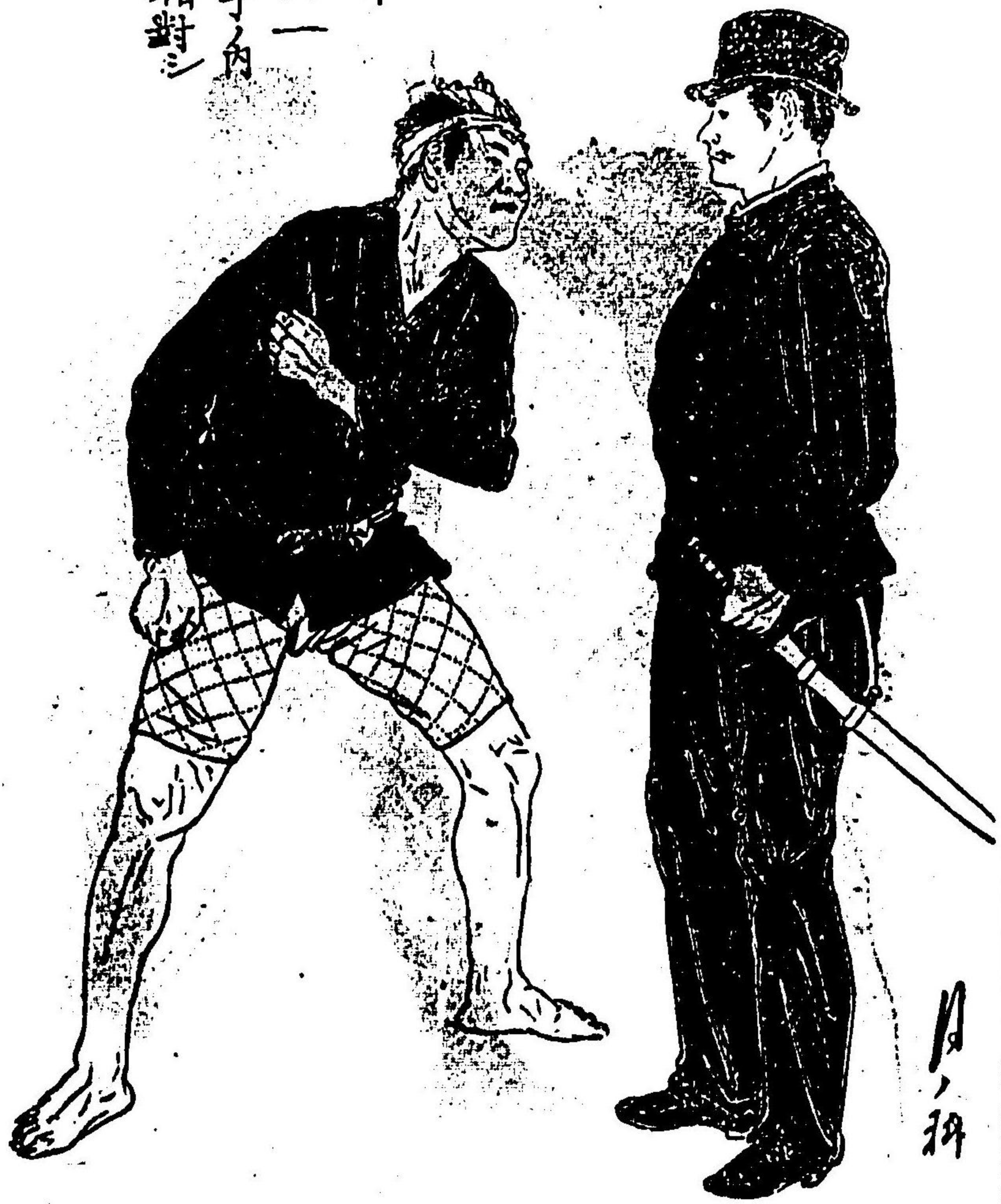


第十一

其三
 前四ノ如ク敵手又
 右足ヲ踏出シ右拳
 ニテ打掛リタル片
 仕手ハ左足ヲ敵
 ノ右後ニ踏出シ體
 ハ右ニ開キ腰ヲ居
 左手ヲ敵ノ鼻ヨリ
 上ニスリアゲ
 腕ヲ充分ニ伸シ敵ノ
 浮キタル片右手ニテ
 敵ノ右足ヲスクフ圖



第十二圖解
 敵ノ先 其一
 神明殺活流形手ノ内
 修正敵手仕手相對
 完圖



其四
 前圖ノ如クニシテ左ノ前ニ
 接グタル圖



其二

敵右拳ヲ揚テ右足
ヲ踏込ミ打掛リタ
ルヲ仕手ハ右足ヲ引
左リ腕ニテ請ル図



四十一

其三

敵ノ打込ミタルヲ
仕手ハ請タル左リ手
ニテ打込タル手首
ヲ取りタル圖



四十二

四十一

其四

前圖ノ如ク仕手ハ取ル
敵ノ右腕脇ノ下ニ右肩
ヲ押ク同時ニ右足ヲ
敵ノ右後ニ踏込キ右
手ニテ敵ノ右肩ヨ
リ襟ヲ取り敵ノ体
ヲ反ラシメテ



四十四

其五

既ニ敵ヲ前ニ投
ケタル圖



四十五

四十四

第十三圖解

帶引其一

良熟心頭流形手の内
敵手右手ニテ
仕手ノ胴締ノ前
ヲ取り引ントスル
回



四十四

其二

敵ノ引クニ任セ同シク
仕手モ右手ニテ敵ノ
前帯ヲ上ヨリ取り引
カレテガラ腹ヲ張り腰
ヲ居左足ヲ敵ノ右股
ニ大キク踏出シ同時ニ左
手ヲ真直ニ伸ハシ敵ノ
腮ニ當テ之ヲ押シ右ノ
手ハ上ニ引揚ル様ニ手前ニ
牽クナリ



四十五

其三

其三
前圖ノ如ク前接
グタル処



第十四
圖解
行連レ左
上頭
其一
殺當流形手
ノ内修正撃
右仕手左
場ノ廣狹ニ
ヨリ互三三
歩或ハ四歩
連行ス四



其二

三歩行キタル
敵手右足ヲ開キ
右手ヲ揚ケタル
四



其三

敵已ニ右手ヲ仕
手ノ前喉ヨリ左
ノ肩ニ掛ケ首ニ
卷キ付ケ右足
ヲ仕手ノ右後
ニ踏込ニ投ゲン
スル四



其四

前圖ノ如ク為サントスルヲ
仕手ハ迅速ニ右回シ左ノ手
ニテ敵ノ後襟ヲ取右膝ヲ
ツキ右手ヲ以テ敵ノ右足
ヲ取リタル図



其五

既ニ後ニ投ケタル処



第十五 圖解 行連右

突込 其一

各流形手ノ内取捨併合
敵手左仕手右連行スル
一貳間或ハ三間ノ地室
リタル片敵右足ヲ右開
キ右拳ヲ以テ突出サン
トスルヲ仕手ハ敵ノ正面
ニ對シ姿勢ヲ正シ腹部
ヲ突出シ左右ノ手ヲ
垂レ執レニナリ
トモ突来レ
ト身構スル
図



其二

敵既ニ右足ヲ踏出シ右拳
ヲ突出ス片仕手ハ右足ヲ
引キ同時ニ左手ニテ敵ノ
拳ヲ右ニ突拂フ図



其三

前圖ノ如ク拂ヒタル
拳ヲ直ニ左手ニテ
其大指ノ方ヲ握
ナリ



其四

前圖ノ如ク左
手ニテ握リタ
ル拳ヲ又右
手ニテ小指
ノ方ヲ握リ
前ニ引タル右
足ヲ前ニ踏
出シ取り名
手ヲ上ニ揚
ケタル図



其五

前ノ自、如ク上ニ揚ゲタル手ヲ左廻シ
同時ニ左足ヲ引キ膝ヲシキ右足ヲ開キ
カタメル



第十六圖解

行連左

右腰投

其一

洪水流四方組
ノ内修正敵手
右仕手左ニ連
行ス



川柳

其二

敵手仕手ニ
或ハ四歩ノ地ニ
至リタル片敵
不意ニ右横
ヨリ仕手ヲ抱
エタル図



其三

敵手仕手ヲ
抱揚ゲタル
図



其二

三

其四

仕手抱玉揚ケラレタルヲ
腹ニカヲ入レ左右ノ腕ヲ張
リ腰ヲ居エ下ニ
脱ケ同時ニ右
足ヲ後ニ開キ
右手ヲ敵ノ左
腹ニサシ敵ノ後帯ヲ
取り左リ手ニテ敵
ノ右襟又ハ右ニ腕ヲ
下ヨリ取り敵ヲ押ス



其三

其五

仕手ノ押スヲ敵ウシト
コタヘタル処



其六

其六

其六

其六

敵コタヘタル片仕手ハ右足ヲ敵右前
ニ踏出シ敵ヲ腰
ノ上ニノスル



其六

此ノ技ハ
海老ノ背ノ如ク
其五

其七

前ヨリ則敵ヲ前ニ接ケ
左足ヲ引タル因



其七

其七

第十七圖解 行連右

壁副 其一

揚心流形ノ内敵手左
仕手右五三三
間或ハ三間ノ
地ニ至リタル片敵右足
ヲ開キ左ニ向キ右ノ手
ヲ以テ打掛ラントス



其二

敵手右足踏出シ右拳ヲ以テ
打カ、ル片仕手ハ右足ヲ踏出
シ右手ハ敵ノ打込ニ右手ニ
擦リ違ヒ手掌ヲ敵ノ
面ニ向ケル



其三

仕手ハ搦シ違ヒニ出シタル
手ニテ敵ノ右腕ヲ上ヨリ
巻キ込ミ其手ニテ敵ノ
脊中ヲ取り左足ヲ敵
ノ後ニ踏出シ左手ヲ敵
ノ左肩ヨリ前ニ廻シ
右襟ヲ取り其腕ヲ
伸シ締メル



其二

其四

前圖ノ如ク敵ヲ締メ片
左足ヲ引キ膝ヲツキ右足ヲ
関ク



第十八圖解行連後口取

其一

各流取捨併合敵手一步
仕手ヨリ先ニ行ク圖



六十九

其二

敵手ニ三步ニテ左足ヲ踏出シタル
時前圖ノ如ク仕手ヲ右ヨリ
振り顧ミル片仕等ハ踏止リ
敵手ノ舉動ヲ窺フ
ニ敵手直ニ左ニ廻リ
打カラントス



七十

六十九



廿三

日

其三
敵手既ニ左廻リシテ右足ヲ踏出シ
右手ニテ打カシテ仕手
左足ヲ引キ右腕ニテ
其打手ヲ受ケル



廿四

其五
乃チ後ニ投ゲ
タ丸圖



其五

第十九 圖解

陽ノ離レ

其一

扱心流形手ノ内修正
 敵手仕手揚ノ廣狭
 ニヨリ敵手ハ一步又ハ二
 步踏出シ佇立シ或踏
 出サス佇立ス仕手ハ三
 步又ハ四步踏出シ右手
 ラ伸シ敵ノ双眼中央
 ニ當ントス敵手ハ左
 手ニテ仕手ヨリ突出
 ス手ヲ拂サマ右足ヲ
 引



刀新

其五

其二

敵手右足ヲ引
クヤ直若
手ヲアゲ
右足ヲ踏出
シ打カハル此間
右モハゲシ



其三

敵手已ニ打掛ルヨリ任手ハ左足ヲ
踏出シ敵ノ右服体ニツキ左手ハ
後ヨリ左リ腰ニ廻ラス右手ハ
敵ノ前ニ當テ腹ヲ
敵ノ右腹ニ著ケ
敵ノ体ヲアゲル



其四

其四

前圖ノ如ク敵ノ体ヲアゲ
直ニ右足ヲ前踏出ス



其五

前圖ノ如ク仕手ハ右足ヲ踏出シ身ヲ捨テ敵ヲ抱ヘ後ニ倒レ敵ヲ打ツケ
ナガラ身ヲカハシ押ユルナリ然ルニ之ハ實際動法上ニハ行ハレ難ク又勢
法上聊カ體裁ヲ用ヰザルテ得ズ故ニ前圖ノ如クニ其儘仕手ハ左右ノ手
ヲ放シ自分ノミ後ニ倒レ敵ノ方ヲ左ヨリ離シナガラ左足ヲ屈シ右足ヲ伸
シ左リニ起キ右足ヲ立テ左膝ヲツキ敵來ラバ又行カシ身構ヘテ爲シ敵
手ハ仕手ノ倒レル際右ニテ(前ニテモ)後(中ニテモ)中ニカヘテ立シテ仕手ヲ認メ次
圖ノ如クニ互ニ禮ヲ爲シ立テ別ル是ニ於テ十六段ノ動法ヲ畢ルナリ

即敵ヲ後ニ打付ケ投ケタル圖

其五再圖

平素勢法上講修体裁裁



第二十一

本光



本光

第二十 變化亂取ヲ示ス

前勢法ハ正則ナリ亂取ハ變則ナリ故ニ此勢法ニ於テ敵手トナリ仕手トナリ其覺タル上十六段ノ内ニテ敵手トナリタルモノ時ニ見込ヲ以テ仕手ノ機ヲ計リ十六段ノ前後ヲトリ又ハ隨意ノ所作ヲ行フ其時仕手ハ直ニ之ニ應ジ自由ニ取合フモノナリ所謂變化亂取ノ起原ナリ又人ニヨリ或ハ時處ニヨリ最初ヨリ互ニ相約シテ亂取試合ヲ行フコトモアリ孰レノ場合ニテモ敵手仕手ノ内聲ヲ掛ク(降參)又ハ手ヲ打スルキハ必ス一方ノモノ直ニ停止シ順次ノ勢法ニ移ルナリ單ニ亂取ノコトナルキハ互ノ間合立合ハ一間以外居取ハ一間以内ヲ置キ禮ヲナシ立合ハ行キカ、リ居取ハ其儘コト機ヲ見變ニ應ジ自由ニ働クモノナリ勝負ハ左ノ條ニテ別ツモノトス勢法變化ハ必ス敵手ノ方ヨリ仕オケ又敵手ノ方ヨリ止ム段ニ雌雄ヲ爭ヒ暴力ヲ弄スルコト禁ス

勝負ノ分ナ方

- 一 勢氣ノ盡キタルキ
- 二 體ヲ固メタルキ
- 三 場ノ廣狹ニヨリ貳間以上押シ切りタルキ
- 四 呼吸ヲ止メタルキ
- 五 線ヲ離レ投ケ棄タルキ 但此一項ハ見證ノ注意ヲ要ス

第二十一 捕繩

捕繩ハ從來數種アリト雖モ當職ノ如キハ必シモ多數ヲ要セス因テ簡便ナル方法一二ヲ示ス又捕繩ハ常ニ右ノ體ニ入レ置クモノトス何トナレハ前ニモ解キタル如ク人ハ十中ノ九右方ノキ、タルモノユエ彼ノ右ヲ我カ左ニ押ヘルモノニテ其取出シ方ニ自ラ緩急アレハナリ

捕繩第一圖 其一

立身流逸見宗助家傳早繩打方ハ先ツ敵ヲ押ヘタル片圖ノ如クニシ右膝ヲ
 ツキ左足コテ敵ノ^右腕ヲ踏ミ手首ノ方ヲ捻ヤ我カ左足ノ向フ^膝ニ掛ケ
 而シテ捕繩ノ先コ輪ヲ作り其手首ニ掛ケ頭毛ヲ握リ繩ヲ敵ノ左リヨリ^順
 ニカハラザルヤウ咽喉ヨリ右ノ肩ニ廻ハシ我カ左手ニテ敵ノ左リ手首ヲ
 取り若シ敵剛方^トテ左手ヲ出サレルハ右腕ヲ捻ヤアケル彼レノ口ニ嘴
 マレサレヤウニ注意スルナリ

此圖一頁ハ長巻ノ巻末ニ要ス



其後敵ノ左リ手首ニ右肩ヨリ
廻シタル繩ヲテ四ノ如ク之ヲクル



八十四

月新

此ニテクニリ放シタル囚



八十三

因ノ如ク約リタルヲ暫時差置クカ或ハ
 他ニ連累等アリテ別ニ手ヲ下ス時其
 逃走セザル様右足ノ大指ヲ約ル



八十八

八十八

関口流大原正信講修ノ捕縄敵ヲウ
 ツムキニシ其上ニ衆リ右足ニテ敵右
 腕ヲ踏ミ其手首ニ繩ヲ掛ケルノ前ノ
 如シ敵若シ剛カニシテ腕ヲ出サザルハ
 八耳ノ下アゴノトマリヲ右手大指ニテ
 押シ又手首ノ繩ヲ首ニカケルノ前ニ
 同シ



八十七

其二
前図ノ首ニ廻シタル繩ヲ敵
左リ腕ノ手首ヲ約ル



八十八

其三
既ニ繩ヲ掛ケ之ヲ起サントスル図



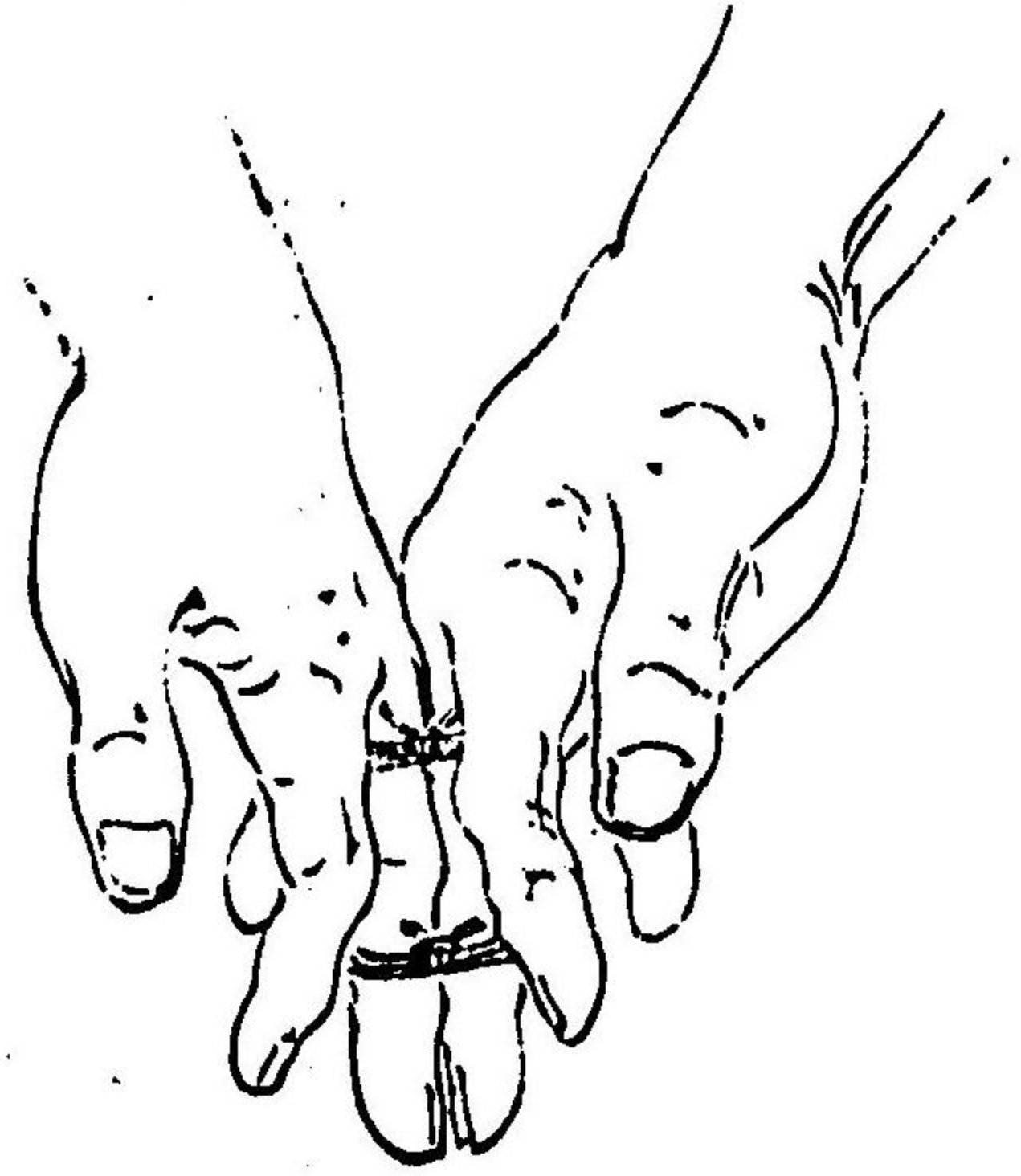
其四
既ニ起シタル圖



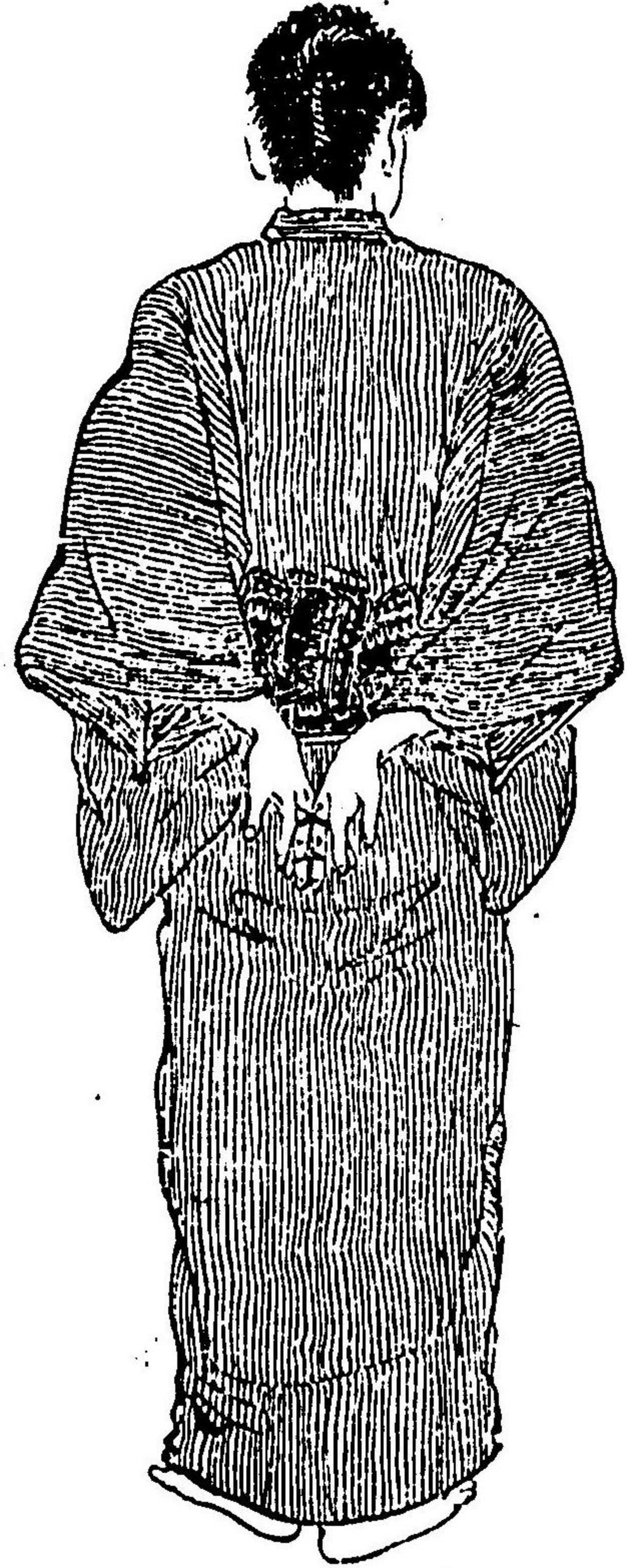
刀新

第二圖 其一

水野流國重信之講修ノ捕繩法萬一捕繩ヲ携帶セズ或ハ多人數捕獲ノ際ニ
シテ捕繩欠乏セシ場合ニハ兩手ヲ背部ニ廻ハシ長サ八寸位ノ元結又ハ紙
捻等ヲ以テ中指ノ根ヲ二重(或ハ一重ニテモハ可ナリ)ニ結ビ其中間ヲ結束ス



九十三



新

九十二

第二十二 活法

殺活ノ法ハ拳法ヨリ出テ種々アリ此法ハ從來各師家ニ於テ大ニ秘スル處
ナリ今ノ世ニ當リテ社會ニ有益ナルモノハ固ヨリ秘スベキニ非ラス況テ
當職員ニ於テチヤ然リト雖モ殺法ノ如キハ害多クシテ益少シ故ニ記セス
活法ニ於テ凡ソ七種アリ皆大同小異ニシテ穴法モ同シ因テ二三ノ法ヲ記
シテ之ヲ示ス時々温習記憶シナハ大ニ裨益スル所アルベシ

活法第一圖解 心愈

車馬或ハ高處ヨリ落テ肢體ヲ打テ氣絶シ又ハ縊死セシ時ナドニ用ユ尤モ
窒患者ヲ扱フハ極メテ穩和ニ取扱フヘシ先ヅ其者ノアチニフシタル左リ
ノ方ニヨリツキ左リ膝ヲツキ右足ヲ立テ腰ヲカマメ右腕ヲ首ノ下ニ差シ
入レ二ノ腕ノ處ヲ枕ノ如クニ當テ圖ノ如クニ起シ左リノ腕ニテ倒レヌヤ
ウニウケ而シテ頭ヨリ初メノ大骨節ヨリ四五節目ノ右ノ方一寸程脇ヲ手
掌ニテ打テアゲナルダケ小指ノ方ニテ重モニアタルヤウニスベシ此膝ノ
ツキヤウハ人々ノキ、タル方ニテ差支ナシトイヘル氣合ハ十分ニ入レテ
施行スベシ尙モ聊カ口傳アリ呼吸ノ復シタル後ニ若シ格別衰弱スルカ又
ハ負傷等アレバ醫師ニ托スヘシ

其二
活ヲ入ルヤ否如回右ノ手ヲ
少シ引キ絶者ホット上ヲ見ル
様ニス可シ



活法第二圖解 膽愈 其一

此活肋骨ヲ打チ或ハ骨ヲ内ヘ打込ミクルキ又ハ水中ニ溺レ窒息シタルモ
 ノニ施ス法ナリ窒息人ノ後ニ左ノ脛骨ヲ突き居エ右ノ脛骨ヲ窒息人ノ脊
 (俗ニ云フ水落)即膽愈ノ處ニ當テ(膽愈ハ前ニ肥シタル骨ノ大節ノ下ヨリ)
(後ニ云フ水落)即膽愈ノ處ニ當テ(九ツ目ノ節ヨリ右ノ方一寸半ノ處ナリ)
 兩手ヲ窒息人ノ脇ノ下ヨリ前ヘ廻シ臍下外陵ノ邊(外陵ハ臍下一寸ノ處ナリ)
 手ヲ當テ後ニ引アゲナガラズ子モ向フヘツクナリ此活ニ口傳アリ金谷元
 良數度此活ヲ施シ人命ヲ救護セシコアリトイフ



其二

前圖ノ如ク施入際膝ノ突キ方ニ
能ク注意ス可シ



活法第三圖解 不容巨闕

此法ハ絶者ノ右側ニ添フテ右足ヲ立テ
左膝ノ突キ左手ニテ絶者ノ首ノ後ヲ
持チ右手ニテ絶者ノ右ノ方帯又ハ
右腕ノ先キヲ握リ之ヲ起ス



其二

絶者ヲ引起コシ左手ニテ倒レヌ
ヤウニシ充分自身ニ氣合ヲ入ル



其三

氣合ノ入リタル時絶者ノ臍下ノ通リ
ヨリ平手又ハ五指ヲソボメ上ヘウント
擦スリ揚ルナリ此活法ハ水中ニ溺レ
タル者ヲ先ヅ水ヲ吐カセルニハ四斗樽
或ハ丸キ者ノ上ニ絶者ヲウツムゲン
ナシ両足ヲ持チユスルナリ併シ此法
ヨリハ前法ヲ以テ最モ第一心得
可シ



縁起並各流派概畧

柔術ノ初メハ角觥ヨリ成レリ蓋シ我國古來人民ヲシテ農耕ノ餘間ニ角觥ヲ行ナハシメテ武備ノ素質ヲ養成シタリ慶長十年漢土ノ人陳元贊トイフモノ明ノ亂ヲ遁レテ本邦ニ來リ舊江戸麻布國生寺(方今トイフ舊福寺)ニ寓居スルニ方リ浪士三人先ツテ該寺ニ寓セリ福野七郎右衛門磯目(一作磯貝)次郎左衛門三浦與次右衛門ト曰フ元贊三人ト情志ヲ通ズ一日衆ニ語リテ曰ク中土ニ拳法(方今曰)アリ人ヲ執フル術ナリ某未ダ其技ヲ學ハズト雖モ頗ル見聞ニ熟セリト緩々委曲ヲ演說ス浪士等之ヲ聞キ相共ニ其技ヲ取捨シ之ヲ角觥ニ配伍シテ一ノ拳法ヲ創成シやはらト名ツケ柔ノ字ヲ用キ柔術ト書シ今ニ至ルマデ其ノ術ヲ傳フ故ニ柔術ノ起原ハ角觥ニ在リテ拳法ハ唯其不足ヲ補ヒタル者ナルヲ知ルベシ彼レノ拳法ハ専ラ術アルヲ以テ術ナキヲ制伏スルニ止リ我が柔術ノ如ク體質ヲ變化シテ弱者ヲ強健ニシ強者ヲ圓滑ナラシムルヲ能ハズ然リト雖モ流派ノ祖師各其主義ヲ異ニシ其

取捨スル所モ大ニ徑庭アリ或ハ拳法ヲ主トシ或ハ體術ヲ主トス故ニ其術モ二法數派ニ別レタリ其概畧ハ緒言ニ載スルヲ以テ茲ニ贅セズ

流名ノ前後ハ舊記名錄ノ順序ニ據ル

關口流

流祖關口柔心ト云フ柔心初名ヲ池尾彌六左衛門ト云フ日向國ノ産ナリ(或ハ曰フ駿河國ノ産)幼ヨリ強勇ニシテ膂力萬人ニ勝レ武藝ヲ好ミ刀鎗柔術都テ蘊奧ヲ究メ甚ダ神妙ナリ體格非凡ニシテ肋骨ハ一枚ヲ以テ成ルト云フ遍ク諸國ヲ經歷シ後チ紀藩南龍公(大納言)ノ召ニ應シ和歌山ニ赴キ祿五百五拾石ヲ受ケ常ニ南龍公ニ侍シ武道ヲ講シ屢闘戰ノ狀ヲ席間ニ班シ各種ノ勢法ヲ明ニス公大ニ其法ヲ賞シ名ヲ關口柔心ト賜ヒ流名ヲ關口新心流ト號ス名聲四方ニ高ク門弟諸州ニ遍シ後ニ新心ノ文字ヲ廢シ關口流ト云フ柔心三男アリ長男ヲ八郎左衛門氏業二男ヲ權右衛門氏英三男ヲ彌太郎某トイフ皆名聲アリ九代ノ孫關口柔心方今慶應義

塾ニ在リテ筭蓑ノ業ヲ塾生ニ授クトイフ

關口正統澁川流

當流ノ祖ハ澁川伴五郎義方ト云フ義方ハ大和國ノ産ナリ關口八郎左衛門氏業ニ從ヒ柔術ノ奧秘ヲ究メ其名大ニ顯ハル舊江戸ニ在リテ諸生ヲ教授ス江湖ノ人呼テ澁川流トイフ其門ニ遊フモノ甚ク多ク男左衛門孫伴五郎皆父祖ノ業ヲ承ク爾來世々伴五郎ト稱ス四世伴五郎時英幼ニシテ聰明ナリ大ニ文事ヲ好ミ後ニ武道ヲ修メ其秘奧ヲ究ム柔術大意柔術稽古規畫風雜話等ノ書ヲ著シ其教法ヲ大成ス寶曆十年故アリテ他流トノ試合ヲ禁ズ當時諸侯以下門ニ入ル者千ヲ以テ算ストイフ舊久留米藩主特ニ此技ヲ講シ藩士ヲ教ヘシヲ托ス因テ之ニ應ジ爾來世々久留米藩ニ師範タリ實ニ當流中興ノ祖トイフ方今第八世伴五郎府下本郷區元町ニ於テ筭蓑ノ藝ヲ襲ク

關口新心流

當流ハ和州舊高取藩ノ人西尾源左衛門忠賢ニ傳ハリタル所ニテ世々柔術ヲ以テ高取藩ニ仕フ流祖ハ關口柔心ナリ柔心ノ二男權右衛門氏英ノ門人伊豫國舊宇和島小野木繼服藏其奧旨ヲ得テ之ヲ長岡八郎兵衛英興ニ傳ヘ長岡氏ハ之ヲ坪川圓藏教心ニ傳ヘ坪川氏ハ之ヲ今泉柔賀齋正春ニ傳フ正春ハ越後國舊長岡藩士ナリ其門人西尾源左衛門克忠ハ安永年間ニ生レ善ク柔術ノ奧旨ヲ究メ之ヲ長男源左衛門忠恕ニ傳ヘ忠恕之ヲ其男源左衛門忠賢ニ傳フ時世途遠ニシテ師弟ノ音信自ラ隔絶ス故ニ西尾氏ハ舊ニ依リテ新心ノ文字ヲ加フトイフ

荒木新流

當流ハ下總國舊古河藩渡邊重四郎ニ傳ハリタルモノニテ始祖ヲ荒木武左衛門トイフ渡邊氏ハ其直門ナリヤ否ヤ詳ナラス又ク單ニ荒木流ノ名アリ開祖ヲ荒木無人齋トイフ何國ノ人ナルヤ亦詳ナラズ拳法ノ達人ナリトイフ其事跡考フベカラズ

起倒流

百八

當流ハ竹中鉄之助ニ傳ハリタリ竹中氏ハ誰人ノ門ヨリ出デシヤ其傳來
詳ナラズ嘉永年間舊江戸神田俗稱白鼠横町ニ住セリトイフ流祖ハ寺田
勘左衛門正重ト曰フ京極丹後守高國ノ家臣ニシテ福野正勝三代寺田平
左衛門ヨリ福野流ノ柔法ヲ傳授セラレシ其精妙ヲ究メ功ヲ積ムト累年
ニシテ終ニ自ラ起倒流ト改號セリ門下末流諸州ニ多シ京極家斷絶ノ後
ニ雲州ニ至リ後又作州津山ノ森家ニ仕ヘ祿貳百石ヲ領セリトイフ其門
人吉村兵助扶壽ノ如キハ傑然タル者ナリ當今竹中氏ノ末門奥田松五郎
其藝ヲ襲ク

楊心流

當流ノ開祖ハ三浦楊心トイフ楊心ハ肥前國長崎ノ産ニテ醫ヲ以テ業ト
ス徳川氏ノ初世ニ方リ九州地方ニ在リ楊心居常門生等ニ語リテ曰ク人
ノ病ヲ得ル多クハ坐食シテ心神ヲ倦飽セシムルニ由レリ故ニ之ヲ未病

ニ避ルノ法ナカル可カテ夫其法ハ必ス適度ノ運動ヲ爲スニ在リト遂ニ
其高足ノ弟子甲乙二人ニ讓リ始メテ居捕五行ノ手形ヲ發明シ之ヲ試ム
ルニ頗ル心神ノ爽快ヲ覺ユト雖モ支體ノ運用未タ以テ充分ナラザル者
アリ更ニ起合行合ノ手形ヲ作爲シ之ヲ習熟スルニ至リテ全ク健康ヲ保
スルノ法備ハレリ楊心已ニ歿シ甲乙二弟子相讓シテ曰ク我法多年實施
シテ効アリ豈獨リ之ヲ私スベクンヤ普ク之ヲ天下ニ公行シ以テ醫道ノ
本分ヲ盡ベキナリト乃チ甲ハ楊心流ト稱シ乙ハ三浦流ト稱シ俱ニ門ヲ
浪華ニ開キ其徒ニ教授ス門弟頗ル多シ楊心流ノ名蓋シ是ヨリ創レリ其
後豊後ノ人ニ阿部觀柳トイフ者アリ楊心流ノ奧義ヲ究メ門弟モ亦多シ
就中江上司馬之介武經トイフ者アリ觀柳ノ甥ナリ幼名ヲ鬼五郎ト稱シ
夙ニ楊心流ノ秘奧ニ通シ叔父歿スルノ後ニ名ヲ改メテ江上觀柳ト號ス
觀柳嘗テ謂ヘラシ柔術ノ技タル特ニ身體ヲシテ健康ナラシムルノ事ナ
ラズ苟モ世ノ武夫タル者ハ斯術ヲ學ハズンバアルベカラズト年二十有

一歳ニシテ江戸ニ來リ演武場ヲ芝赤羽根心光院ノ傍ニ開設シ大ニ斯ノ道ヲ講シテ武道ノ一ナリト稱セリ門弟凡千五百有餘人アリ享年四十八歳ニシテ歿ス實ニ寛政七年六月七日ナリ是ヲ本流中興ノ祖トス門人戸塚正藏業ヲ受ケ其奥義ヲ究ム正藏ハ江戸ノ産ニシテ幼名ヲ忠司ト稱シ後ニ彦右衛門ト改ム場ヲ芝西久保八幡山下ニ開キ弟子ヲ教授ス前後從學スルモノ九百有餘人ニ及ブ後ニ水野家ニ聘セラレ其藩ニ師ガリ蓋シ觀柳ガ嘗テ教授ノ爲メ同藩ニ出入ニセシ緣故アルヲ以テナリ彦右衛門春秋七十有六歳ニシテ歿ス終身間自ラ單ニ江上流ト稱ス蓋シ師恩ニ報スルノ誠意ニ出テタルナリ彦右衛門ノ長男戸塚彦助ハ少ニシテ既ニ秘術ヲ究メ奥義ニ達ス年二十有五ニシテ父ノ業ヲ襲キ子弟ヲ教授ス父ノ遺命ヲ奉シテ流名ヲ舊ニ復シ揚心流ト稱ス亦タ沼津藩ニ師タリ彦助ノ世他流ヨリ入門從學スルモノ日ニ益多シ文久年間徳川將軍家茂公命シテ賜テ賜ヒ其技ヲ上覽ニ供セシメ講武所ヲ設クルニ及ビ彦助ヲシテ征

夷府ノ教職ニ任セシム此時ニ當リテ彦助其柔術場ヲ芝愛宕山下ニ移ス弟子無慮千六百有餘人アリ當時全國其右ニ出ツルモノナシ就中其亂取ノ術ニ於テハ中古ノ開祖ト謂ツテ可ナリ維新革命ノ後ニ下總國千葉ニ至リ同縣ノ警察監獄兩署ニ師範タリ明治十九年四月十五日ニ病ヲ歿ス享年七十有四歳ナリ其病ヲ得ルノ前日ニ至ルマテ尙醇々トシテ子弟ヲ教授セシトイフ長男英美箕裘ノ業ヲ襲ギ方今尙千葉縣ニ奉仕セリ

長移心頭流

當流ハ筑後國舊久留米藩下坂五郎兵衛ニ傳リタリ流祖ハ笠原四郎左衛門トイフ年歴ハ未ダ詳ナラズ筑前國舊福岡藩ノ人ナリ少年ノ時ヨリ柔術ヲ好ミ精妙ヲ得タリ號シテ長移心頭流トイフ門人世々其術ヲ傳フ久保貞治其宗ヲ承ケ之ヲ森彌兵衛ニ傳フ森氏ハ舊久留米藩士ナリ又之ヲ下坂氏ニ傳フ下坂氏ハ其奥旨ヲ究メ久留米ニ師範タリ方今福岡縣筑後國御井郡枝光村ニ住セリ

扱心流

當流ノ祖ハ犬上左近將監永勝トイフ永勝ハ江州犬上郡ノ産ナリ少クシテ柔術ヲ好ミ其妙旨ヲ得タリ後扱心齋ト號シ流名ヲ扱心流ト稱ス嫡男犬上郡兵衛永友ニ傳フ永友尾張國（郡名詳ナラズ）大野村ニ住ス伊藤助兵衛重勝ハ勢州五味塚ニ住シ柔術ヲ以テ舊彦根藩ニ仕フ永友ノ弟ナリ其子伊藤四郎兵衛宗正次男柳橋五兵衛良貞並ニ柔術ヲ以テ名アリ永友ノ嫡男郡兵衛永保ハ從弟良貞ヨリ父祖ノ業ヲ傳ヘ其奥旨ヲ究メ技術絶妙ナリ同流中興ノ祖ト稱ス享保九甲辰年二月京都ニ至リ澹野專右衛門ニ從ヒ起倒流ヲ講修シ尋テ澹野氏ト共ニ舊江戸ニ至ル後故アリテ起倒流ノ巻軸ヲ澹野氏ニ返シテ扱心流ニ復ス終ニ舊久留米藩主ノ召ニ應ジテ有馬家ニ仕フ其子郡兵衛永昌ニ至リ故アリテ家斷絶ス同藩門人石野作左衛門長鏗越後國舊村上藩ナル門人塚本藤馬玄海等其宗ヲ承ク作左衛門精男郡左衛門長正其子郡藏長明軀幹長大ニシテ臂力兼ニ勝レ其名モ頗ル高

シ塚本氏ハ村上藩ニ於テ師範タリ長男藤馬玄吉其業ヲ繼ク玄吉ノ長男ハ即チ塚本玄久氏ナリ同氏ハ父祖ノ餘業ヲ持シテ石野郡藏ニ從ヒ其宗ヲ得ルト云フ

戸田流 又々氣樂流ト曰フ

當流ハ奥澤七事齋ニ傳ハリタリ流祖ハ室町將軍家ノ臣コレテ水橋準人トイフ幼ヨリ武術ヲ好ミ遂ニ劔術ノ奥旨ヲ極メ美名當時ニ高シ門人數千アリ中ニモ戸田頼母山崎伊織ノ兩氏其妙旨ニ達ス時人呼テ水橋流ノ龍虎ト號ストイフ戸田氏二男アリ長ヲ盛玄ト曰ヒ次ヲ治部左衛門ト曰フ共ニ劔道ニ達セリ父頼母老病ニヨリテ歿シ兄弟其遺業ヲ繼ク時ニ西國ノ浪士鹿島梅津トイフモノ劔術ニ秀テ自ラ鹿島流ト號シ勇名遠近ニ聞ヘ戸田氏ト特角ノ争ヲ生シ終ニ眞劔ヲ以テ雌雄ヲ決スルニ至リ戸田氏遂ニ鹿島氏ヲ討果ス是ヲ以テ其名四隣ニ輝ク此時ニ當リ美濃國齋藤右兵衛大夫龍興近國ヲ攻畧シ天下ヲ並吞スルノ志ヲ抱キ盛玄ノ勇名ヲ

聞キ招キテ祿三百石ヲ賜ヒ簷下トス其後處々ニ戰功アリ龍興稻葉山籠城ノ時討死セリトイフ弟次部左衛門亦武藝ヲ以テ顯ル豐臣秀吉之ヲ聞キ召シテ劍術ノ師範トス後ニ前田利家ニ仕ヘ祿四百石ヲ受ク屢々戰場ニ出テ、偉功ヲ著セシト云フ治部左衛門一男一女アリ男勇助ハ濱州賤ケ嶽ノ戰ニ戰死セリ因テ其門人山本八左衛門トイフ者ヲ以テ女婿トシ武道ノ奧義ヲ傳ヘタリ六左衛門戶田氏ノ業ヲ繼ギ多年研究ノ後ニ美名遠近ニ輝キ劍術ハ戶田流鎗術ハ三花無敵流柔術ハ氣樂流ノ奧旨ヲ探得セリ越中國末盛ノ軍ニ前田侯ニ從フテ大敵數百人ヲ討取リ其功ニヨリテ祿高壹萬三千石ヲ賜ハリ戶田越後守源高興ト稱ス爾來秀輩相繼ギ十四世齋藤武八郎ニ至リ之ヲ與澤七事齋ニ傳フ與澤氏ハ舊江戸花川戶町ニ住シ門人數百人アリ大ニ當時ニ鳴レリ慶應元丑年六月六日病ヲ歿セリ享年五十有八歳ナリトイフ

一心流

當流ハ三州舊豐橋藩渡邊喜三太ニ傳ハリタリ原流ハ應變流淺山一傳流ノ兩派ヲ併合セシモノナリト云フ渡邊氏ハ文久年間舊江戸ニ來リ戶塚磯ノ兩家ニ隨從シ其宗ヲ得テ舊里ニ歸リ其藩ノ師範タリ今尚豐橋ニ住ストイフ

天神眞楊流

當流ノ祖ハ磯又右衛門ト云フ磯氏ハ勢州松坂即舊紀州藩ノ地ニ生ル幼名ヲ岡山八郎次ト曰フ武術ヲ好ミ十有五歳ニシテ舊江戸ニ來リ浪士一柳織部ニ就テ楊心流ノ柔術ヲ學ブ一柳氏歿スルノ後ニ本間氏(通稱丈右衛門ト曰フ)ニ從テ眞神道流ヲ學ビ其奧旨ヲ究ム後故アリ本間氏ヲ去リ(師弟ツノ説)遍シ諸國ヲ經歷シ終ニ楊心流ト眞神道トヲ折衷シテ其妙旨ヲ究メ覽シテ天神眞楊流ト曰フ其門ニ遊ブ者多シ其名世ニ高シ後年其名ヲ磯又右衛門柳關齋トイフ舊江戸於玉ヶ池ニ住ス安政年間ノ人ナリ又眞神道流ノ祖ヲ山本民左衛門英早トイフ當時其名尤高シ門人本間氏其宗ヲ得其

門ニ香川爲春トイフ者其奥旨ヲ究ノ安政年間舊江戸麹町五丁目ニ住シ
特ニ接骨ノ妙ヲ得今尙埼玉縣榛澤郡岡部村ニ住ス

殺當流

當流ハ日向國臼杵郡舊延岡藩内田一心ニ傳ハリタリ始祖ヲ内田勘左衛
門トイフ(其産地)橋本一夫齋ニ從ヒ南蠻一法流ノ拳法ヲ學ビ遂ニ殺
當ノ妙旨ヲ悟リ後ニ自ラ殺當流ト號ス世々舊延岡藩内藤家ニ仕ヘテ師
範ヲリトイフ

一傳無雙流 水野流

當流ハ兵庫縣播磨國揖西郡龍野町ナル舊脇坂淡路守ノ藩士山田圓左衛
門ニ傳ハリタリ本流ノ開祖ハ詳カナラス又(無雙流)流名ヲ聞カズ蓋シ夢
想流ノ類名アリ其開祖ヲ夏原八太夫ト曰フ小具足ノ達人ナリ今川久太
夫其傳ヲ繼ク武井徳右衛門松田彦之進其術ヲ相承シトイフ又四國中國
邊ニ此ノ流派ヲ存セリ接スルニ夢想ヲ無雙ニ更改セシ者ナランカ

實光流 楠流

當流ハ勢州舊津藩藤堂家武塲ニ於テ行ハレタリ師ハ同藩實光流柔術江
原慶太夫楠流拳法佐伯彦之進トイフ兩流ノ開祖モ詳ナラス津藩武塲ノ
師範ヲリトイフ

一傳流

當流ハ三河國舊濱松藩井上家ノ臣太田藤右衛門ニ傳フ藤右衛門父ヲ幸
吾兵衛ト曰フ享和年間ノ人ニシテ同國舊豊橋藩士織田伊兵衛ニ從ヒ本
流ノ柔術ヲ學ビ其奥旨ヲ究メ遂ニ濱松ニ歸リ井上家藩士ノ師範ヲリト
イフ開祖ヲ丸自主水正トイフ(産地)其碑文ニ官ヘルコアリ曰ク
自壯好刀法達拔刀之妙旨臨機應變無出其右者自稱一傳流國家彌右衛
門得其宗彌右衛門傳之淺山氏(通稱内)淺山氏得其術絕妙遂號淺山一傳
流門人海野一郎右衛門尙久傑出從尙久得其宗者曰金田源兵衛正利有
門人若干爾後傳來不詳

心明殺活流

當流ハ下總國舊佐倉藩堀田家ノ臣田邊治郎左衛門重祿ニ傳ハリタリ本
 流元來拳法ヨリ出ヅトイフ開祖ハ揚心流秋山四郎左衛門義時ト曰フ年
 歴ハ詳ナラズ肥前長崎ニ住スル支那人武官トイフモノ義時ニ授ケルニ
 捕手三手活法二十八活ヲ以テス後義時其奥旨ヲ究メント欲シ太宰府天
 神ニ禱リ遂ニ其妙秘ヲ悟リ捕手三百手ヲ工夫シテ揚心流ト號ス云々ト
 大江仙兵衛廣富其流ヲ中興セリ貞享年間ノ人ナリトイフ殺活流ノ祖ヲ
 上野縦横義喬ト曰フ佐倉藩ノ人ナリ揚心流ヲ學ビ(傳來詳)後故アリテ心
 明殺活流ト號ス門人西羅隨軒幸繼ニ傳フ幸繼ハ其子治郎允幸智ニ傳ヘ
 幸智之ヲ松浦國之進寛ニ傳ヘ松浦氏之ヲ増田繁右衛門綏民ニ傳ヘ増田
 氏之ヲ田邊氏ニ傳フ世々相傳ヘテ佐倉家ノ師範タリトイフ
 却說揚心流ニ同字同名ノ二流アリ開祖ハ一ツナラン然レヒ年曆迹遠
 ニシテ詳ナラス

立身流

當流ハ下總國舊佐倉家ノ臣逸見宗助ニ傳ハリタリ開祖ヲ立身三京トイ
 フ年歴ハ詳ナラズ亦西國邊ノ人ナリトイフ刀鎗及捕手ノ妙旨ヲ得テ立
 身流ト曰フ長男石見守孫數馬佐相傳ヘテ子弟ヲ教授ス元祿年間羽前國
 山形ノ人逸見柳方トイフ者數馬佐六世ノ門人竹川喜兵衛ニ從ヒ刀鎗及
 ビ捕手ノ術ヲ學ビ其奥旨ヲ究ム是ヲ逸見氏ノ祖トス其子宗八其業ヲ繼
 ギ後下總國舊佐倉家ニ仕ヘ世々藩士ノ師範タリ宗八四世ノ孫ヲ信敬ト
 曰フ其子宗助ニ家業ヲ傳フ

拳法圖解終

柔術者蓋為武技之要况於其保人健
康大有他技所不及乎此編細載其術
無復餘蘊其裨益世道亦大矣讀者不
可以其小道而忽之也

明治廿年四月十一日

岡本監輔妄言

明治二十年十月十九日版權免許
同二十一年一月出版

(定價金四拾錢)

著者

東京府士族

久富鐵太郎

四谷區南伊賀町四十二番地

出版人

東京府平民

須原鐵二

日本橋區西河岸町十二番地

印刷所

藏田活版所

京橋區元數寄屋町四丁目貳番地

賣 捌 書 肆

東京日本橋區通澄丁目十五番地

北 島 茂 兵 衛

同 通三丁目

丸 屋 善 七

同 京橋區銀座四丁目

博 聞 本 社

大坂備後町四丁目

博 聞 分 社

同 心齋橋筋南久寶寺町

前 川 善 兵 衛

同 本町四丁目

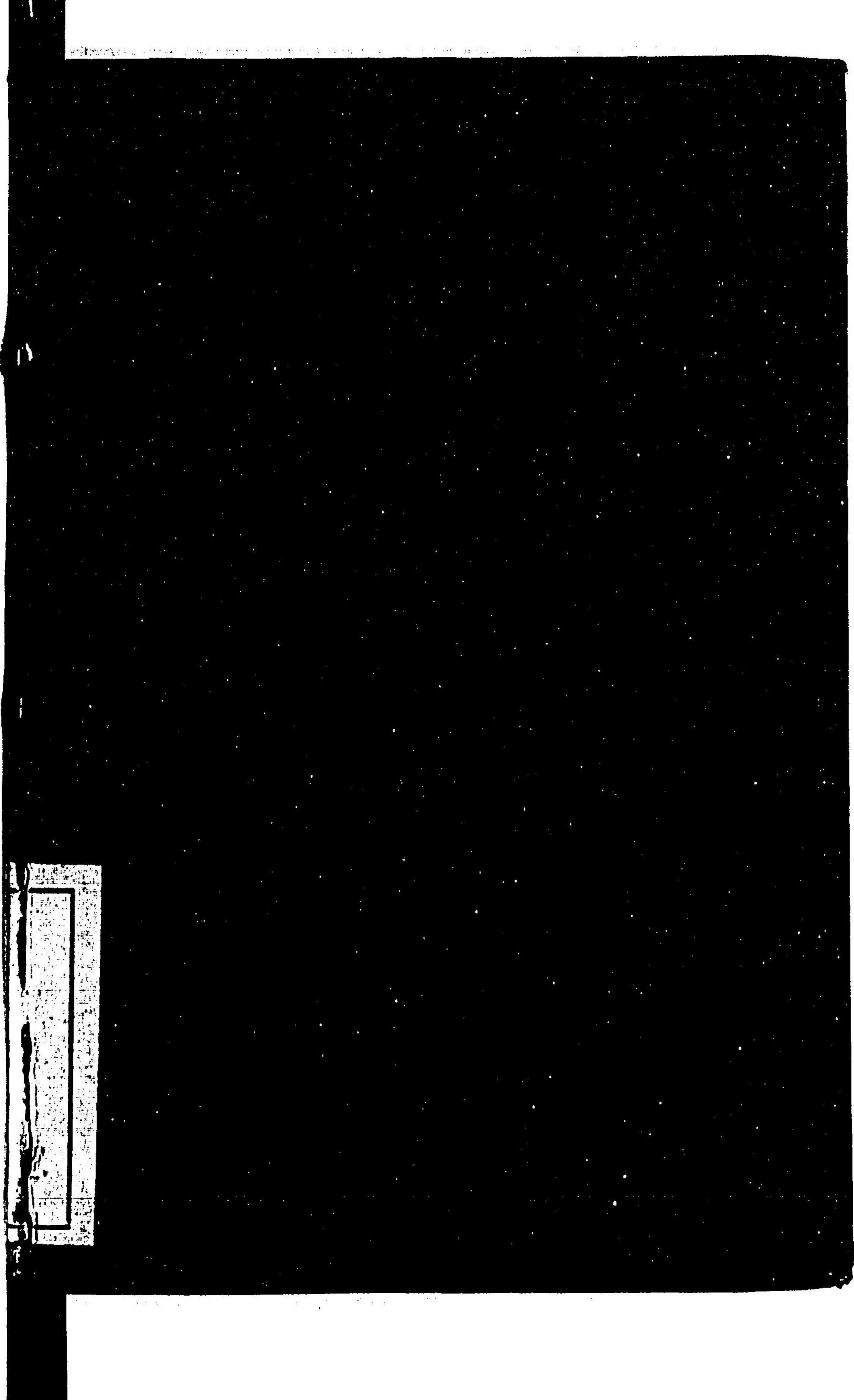
岡 島 真 七

同 高麗橋二丁目二十三番地

久 榮 堂 熊 谷 本 店

神 戶 港

久 榮 堂 支 店



25
491

075215-000-3

25-491

拳法図解

久富 鉄太郎/著

M21

CEM-0119

